

終わらず、僑郷の分類ごとに僑郷変容の構造図を提示するなどは考えられなかったであろうか。研究全体としては、福建省の福清と福州、浙江省の青田と温州の比較研究によってより事例を一般化することはできなかったのであろうか。こうした点が惜しまれるが、資料収集に制約の多い中国を研究対象地域として、これまでエスニック研究に欠けていた移民母村の実態を付与したことは大いに評価できよう。

(大島規江)

佐々木博編：『最後の博物学者 アレクサンダー＝フォン＝フンボルトの生涯』古今書院，2015年8月刊，262p.，5,400円（税別）

本書は、巨人アレクサンダー・フォン・フンボルトの生涯を丹念に描いた一代記である。知の巨人・フンボルトの名はあまりに有名であるが、その一方で89年にわたる豊饒な彼の生涯について、日本語で読むことのできる伝記の類いは僅少である。「科学の帝王」、「近代のアリストテレス」、「最後の博物学者」、「地球学の開祖」、「ゲートを継承する自然科学者」など数々の異称をもつフンボルトは、地理学者の範疇に収まりきれないがゆえに斯界における傑出したスターといえるが、本書はフンボルトのこうしたアクティブな生涯の魅力をあますことなく伝えてくれる。

本書についてはすでに優れた書評も発表されており（大嶽2015）、評者の紹介はいささか蛇足の感はあるが、まず簡単に各章の内容を紹介しよう。

1章（本書ではローマ数字のI，以下同じ）「今なぜアレクサンダー＝フォン＝フンボルトか？」では、フンボルト家および生涯のあらましが整理される。周知のようにフンボルトの多くの著作はフランス語でなされている。当時のプロイセンの政治体制に反発したフンボルトは自由なパリに憧

れ、『新大陸の熱帯地域への旅行（全30巻）』もパリで書かれた。一方で著者は、フンボルトを真正銘のプロイセン人であったとし、その根拠として、①質素な生活スタイル、②自立意識、③強い意志、④勤労意識、⑤時間の正確さ、を挙げる。この偉大なる「科学者」を育んだ環境と旺盛な好奇心、冒険心の源は何か、人間形成の視点から本書ではフンボルトの生涯が描かれていく。

2章「灰色で友だちもいない幼少期」では、ベルリンに生まれたフンボルトが3人の家庭教師のもとで学び、とくに3人目の家庭教師であったクントの薫陶を受け、兄・ヴィルヘルムとともにサロンで自由な雰囲気に触れていく様子が描かれる。

3章「四つの大学で勉学」は、フランクフルト（オーデル）、ゲッティンゲン、ハンブルグ、さらにフライベルクでの学生時代のエピソードである。フランクフルトでは、身体を鍛えるとともにギリシャ語、ラテン語、数学、植物学、絵画などを独習した。ゲッティンゲンでは、法律学を中心に哲学、文学、古典語を熱心に勉強するとともに、ライン川沿いの旅に出かけた。親友となるフォルスターとの出会いもこのときである。母親の意向もあり商科大学（ハンブルク）や鉱山大学（フライベルク）で実学を学ぶものの、旅を日常とし、自然の相貌とその構成原理に魅せられていく姿が生き生きと描かれる。孤独を愛し、一人自分の「思考の作業場」で粘り強く勉強する姿がほほえましい。

4章「鉱山官時代」では、鉱山大学を卒業後、鉱山官として奮闘した若きフンボルトが描かれる。私費で鉱山労働者訓練学校を開設し、若干25歳にして、上級鉱山監督官に昇進する。鉱山で働きながら同時にそこで自分の研究を続けていた。ゲートとの交友が生まれたのはこの時期である。また鉱山官時代に、4か月を超えるアルプス調査旅行に出かけている。地球物理や大気、博物

学に関心を抱いていたことが友人の言として語られる。

5章「海外探検への自立」では、27歳で母の死を迎え、大きな財産を相続するとともに自由を得たフンボルトは、鉱山官を辞職し研究旅行の夢に向かって走り出す様子が描かれる。

6章「アメリカ探検旅行」は、いよいよフンボルトによる本格的な探検旅行の始まりである。テネリフェ島（カナリア諸島）を見た際の「なんと素晴らしい光景だろう！なんとという喜びであらうか！」は、まさに地理学の真髄であろう。ヴェネズエラ・オリノコ川～キューバ～アンデス山地～メキシコ～アメリカ合衆国と5年間にわたる新大陸探検旅行について、豊富な写真とともに編年体で描かれる。

7章「アメリカからの帰還と二年間のベルリン滞在」と8章「アメリカ旅行をまとめるパリ滞在記」では、1804年（34歳）に帰国してから、その後パリでアメリカ旅行記を執筆した時期（1807～1827年）のエピソードが綴じられている。探検旅行から戻ったフンボルトを待ち受けていたのは、ナポレオン支配下のヨーロッパという現実だった。外交官・国務大臣として活躍した兄・ヴィルヘルムとの葛藤やヨーロッパの政治・社会の大きな変動に巻き込まれつつも、研究と講演、執筆活動に邁進するフンボルトの姿が浮き彫りにされる。

9章「ベルリン帰還と市民講座」では20年間のパリ滞在からベルリンに戻ったフンボルトがジンクアカデミーで16回に及ぶ講演を行った記録が著されている。詳細なテーマは本書に譲るとして、フンボルトの関心の広さと当時の仕事ぶりがかがえる。

10章「ロシア・中央アジア探検」では、60歳になったフンボルトによるロシア・中央アジア探検の全行程18,000キロに及ぶ8か月半の大旅行が

描かれる。ロシア政府のスポンサードにより出かけた探検調査であったが、本来の目的であった鉱物資源探査に加えて、ウラル以東のシベリアにおける植生・動物・景観の克明な観察結果や、19世紀前半のロシア・シベリアの開拓前線での人々の暮らしが詳細に記されており、フンボルトによる探検記はすぐれた地誌書であることがわかる。

11章「宮廷貴族にして科学の支援者」では、ロシアから帰国したフンボルトが、国王ヴィルヘルム3世の側近として否応なしに政治・外交の舞台に巻き込まれつつも「科学と移民のパトロン」として、貧しい研究者に経済的な支援を行い、アメリカ合衆国の大学へ不遇な学者を紹介する姿が描かれる。

12章「晩年の生活」と13章「今日に残したものの」では、齢80を超えてもおお旺盛な意欲をもって執筆する姿と宮廷内では煙たがられ、孤独に過ごした最晩年の様子が描かれる。フンボルトの葬儀はベルリン大聖堂にて国葬として執り行われた。教授になることもなく、弟子たちを周りに侍らすこともなく、エリート社会に身を置きつつも絶えず市民社会を作り出そうとしていたフンボルトは、まさに博覧強記にして最後の百科全書家といえるだろう。「植物学者であり、動物学者であり、地質学者であり、地理学者であり、気象学者であり、測地学者であり、天文学者であり、生態学の開祖であり、考古学者であり、科学史・文化史・鉱山学・国会経済学・政治学者であり、外交官でもあった」（本書229-230）という著者の言葉が偽りでないことは本書全体が物語っている。

著者の佐々木博先生は評者が学類（学部）時代からの恩師であり、勤務先でもご一緒させていただいた。地理学史にもフンボルトにも明るくない評者が本書を取り上げたのは、佐々木先生の学恩に感謝する気持ちもあったが、それ以上に「佐々木流フンボルト」を知りたいという気持ちだった。

評者がフンボルトを学んだのは手塚 章先生の講義である。1992年に大学院に入学した評者らは、地誌学研究法の講義で、前年に上梓された『地理学の古典』を精読した。6年後にフンボルトの魅力伝える続編が刊行されたときの喜びは今でも覚えている。フンボルトの魅力は、現地での生き生きとした体験に基づく具象的な記述にあり、フンボルトの旺盛な好奇心や、景観や地域の現実に注がれた観察眼、さらには「つじつまあわせ」にこだわらない柔軟な精神や雄大な構想、自由な発想にある（手塚1997：13）。これこそがフンボルトの魅力の源泉なのだろう。今回改めて西川先生や山野先生によるフンボルト記（西川1988；山野1998）に目を通して見たが、いずれもフンボルトの八面六臂の活躍ぶりや地理学に与えた影響の大きさを教えてくれる。

本書は「〇〇学者」というスケールでは収まらないフンボルトを環境論的、すなわち「どのような環境がフンボルト的人物を育んだのか」という視点から描き出そうとする。それでは、18世紀末から19世紀後半にかけてのヨーロッパの政治・社会的背景、家族とのかかわり、学問的関心、経済的状况などフンボルトをとりまく環境が最後の博物学者を生み出したのか。答えはノーである。「絶大なる好奇心と活動力から、おのれに課せられた使命を感得し、完遂したためなのか」（本書pp.14）という言葉に、著者の思いが込められている。

本書の目的はフンボルトの生涯を克明に描くことであり、主人公がアレクサンダー・フォン・フンボルトその人であることは言をまたない。

しかしながら本書は、フンボルトの生涯を通して（仮託して、といえるかもしれない）、地理学の魅力を語らせ、地理学者としての道を伝えようとする佐々木先生のメッセージであるように思える。誤解を恐れずに言えば、フンボルトの生涯を通して地理学者・佐々木博のメッセージである。

自由を愛し、旅を住処とする人生。権力からは身を遠ざけ、社交好きで、多くの書簡を残しつつも孤独を愛したフンボルト。この生き方はまさに佐々木先生ご自身ではないのか。傘寿を迎えてなお、意気軒高な佐々木先生のお姿とフンボルトが評者には重なってみえる。おしゃれで自由なパリの雰囲気や憧れつつも、実直で真面目なプロイセン人（的な）としての生き方を全うした点も然り。若き日の佐々木先生が目を輝かせてフンボルトの著作を読みふけたというエピソードも今ならわかる。お金に不自由なく自由に旅行し、何の勤務にも縛られずに科学の仕事にうちこんだフンボルトの生涯には憧れもあるが、別次元すぎて共感することは難しい。本書はそのような我々に手の届かない大スター・フンボルトの精神が身近なところで息づいていて、今でも地理学者の原点であることを伝えてくれる貴重な本であるといえるだろう。本書評を締めくくるにあたり、ゲッティンゲン時代のフンボルトの師であったヒテンベルクの言葉を引用したい。「どんな人間にも眠っているシステムを覚醒させるのは書くことである。書くことによって、人は誰でもたとえ自分の中にあつたものでも、これまではっきりと認識していなかった何かをいつも呼び覚ましてくれる」（本書35-36）。

文 献

- 大嶽幸彦（2015）：（書評）佐々木 博『最後の博物学者アレクサンダー＝フォン＝フンボルトの生涯』。地理学評論，88，623-625。
 手塚 章編（1991）：『地理学の古典』古今書院。
 手塚 章編（1997）：『続・地理学の古典－フンボルトの世界』古今書院。
 西川 治（1988）：『地球時代の地理思想－フンボルト精神の展開』古今書院。
 山野正彦（1998）：『ドイツ景観論の形成－フンボルトを中心に－』古今書院。

（松井圭介）